

「辛亥革命から百年を考える」

司会：福家道信（近畿大学）

報告

歴史：呂芳上（台湾国史館）

文学：山田敬三（孫中山記念会）

経済：梶谷懐（神戸大学）

法律：高見澤磨（東京大学）

ディスカッサント：西村成雄（放送大学）

趣旨説明

福家 道信

今年辛亥革命から百年に当たる。全国大会を近畿大学で開催するにあたり、共通論題は「辛亥革命から百年を考える」となった。個人的には、何らかの歴史的事件から「〇〇年」というテーマ設定は、多くの学会シンポジウムに常見されるもので、何となく凡庸に思われる一方、辛亥革命を歴史学のテーマとして、正面から取り上げる催しもあるはずなので、今大会でどのように特化できるのか不安を感じないわけでもない。しかし、実際、2011年という数字から即座に連想されるのは百年前の辛亥革命であり、何も歴史事件としての辛亥革命それ自体に焦点を絞るのでなくとも、清朝が終焉を迎えることとなった辛亥革命を念頭に、百年という歴史的時間のスパンでわれわれ中国研究者が各自課題とするところを検討するのは、それなりに意味があるだろうと考えた。幸い、共通論題への参加をお願いした諸先生からは快諾を得ることができた。

いまさら言うまでもなく、中国の経済発展とそれに伴う中国社会各方面の変化はこの一年を取り上げてても非常に大きく、それらの情報と分析は最新の年鑑に収められている。確かに、耳目を刷新する出来事は次々に生じているし、年来指摘され続けてきた発展の影の側面に属するような事象もないわけではない。上海国際博覧会は来場者が史上最高の7400万人を超えた。GDPで中国は日本を追い抜きアメリカに次ぐ世界第2位となった。だが、その一方で尖閣列島問題が起き、今年になって高速鉄道事故が報道された。アメリカ国債が格下げされ、米ドルの信用が落ち、未曾有の円高が続く今、否が応でも世界の視線は中国経済の動向に集まる。

いずれにせよ、個別的な事件や情報に接し、また実体験することを通して、われわれは中国のイメージを喚起し、確認し、修正し、更新する。このことは日本人が中国について行うばかりでなく、国外の人々においてもそうであり、中国国内外に暮らす中国人自身が行うことでもある。インターネットのツイッターやfacebookで瞬時に遠隔地の情報に接することが可能となった今日では、従前にもまして強くそう感じられる。中国は変化し、情報を受容する人間の中で中国像はさまざまなレベルで変化する。それにしても、これが中国、中国人だという中核となるイメージはあるはずである。

中国像ということで過去を振り返れば、辛亥の年まで行かずとも、日中戦争敗戦直後において、また、中華人民共和国建国当時において、さらに「文革」当時、或いは日中国交回復当時においても、わが国の中国研究者は時代と社会状況の中で必要に応じて、それぞれの研究と言説において中国像を追い求めた。それらはその時々において新たな挑戦であった。しかし、現在われわれが直面している中国は、20世紀のどの時期とも異なり、社会の諸側面で様々な変化を示しつつ、グローバルな規模で自己実現を達成しようとしているかに見える。ただしここで言う自己とは、中国の歴史の長さを考えた場合、たやすく輪郭が見えるというものではなさそうだ。それだけに、アニュアルなスタンスを一度離れ、時間のスパンを大きくとり、百年のスケールで個別研究を見直す意味があるろう。ここで先日、恩師から教えていただいた言葉をずばり繰り返そう。「21世紀は、中国像が大きく転換する世紀となるでしょう。どのような中国像を提示するか、それは新たなチャレンジです。」

この共通論題では歴史、文学、経済、法律の各分野から百年の中国を多角的に検討、議論し、認識を深めてゆきたい。今回の討論が、21世紀のこれからの中国をどのように考えるか、その一助となれば幸いである。

辛亥革命：台灣觀點

呂芳上

100 年前的辛亥革命，締造了中華民國，終結中國數千年的帝制，它意謂著中國的政治轉型，而非僅是傳統歷史上的易代鼎革。這場革命亦是中國知識界長期思想蓄積的結果，當中既有革命黨人的信念、流血，也絕對少不了思想界弄潮兒、立憲派人物的啟發。推翻君主制度，建立共和制度；廢除專制政治，實行民主政治，正是他們共同的貢獻。從歷史經驗看，建立了共和制度並不等於實行了民主政治。1912-1913 年，民國第一次可以試行政黨政治的機會喪失了，主要困境包括「其時未至，其俗未成，其民不足以自治」之故。對大部分的國家來說，欲由舊制度走向現代政治制度的建立，需要一點時間。辛亥革命爆發，帝制傾覆，到 1980 年代在台灣的中華民國實行政黨政治，費時近 80 年。

1949 年以前，參與革命的國民黨人馮自由、鄒魯等，對辛亥革命的回憶文字或撰述論著，本其革命黨正統立場，對日後的台灣近現代史學界影響不小。戰前中國史學界有所謂「史觀派」與「史料派」之對壘，1950 年代以後，因為獨尊馬克思主義，史觀派在中國大陸掛帥，但史料派則在台灣有了傳承。重視史料的學者羅家倫，1953 年起在黨史會編印《革命文獻》史料集，對台灣學界的辛亥革命史研究，有深刻影響。郭廷以對近代史研究和近史所的研究工作奠定了既重檔案又提示重大議題的「南港學派」之基礎。另一個值得注意的現象是，台灣未對西方世界關上大門。台灣近代史學界運用社會科學的成果，雖不理想、也不算成功，但至少證明台灣學界有跳脫官方正統史觀的潛力，更沒有漠視西方史學的研究方法。

台灣學界之投入辛亥革命史研究，自始即有若干有利的條件。其一，辛亥革命史料在 1950 年代已經陸續刊布。其二，早在 1960 年代，學者想調閱國民黨黨史會所藏 1895 至 1920 年間的史料，問題不大。其三，台灣官方對學界的控制，和中國大陸相比，束縛確實較小，禁忌較少。1960 至 1980 年代間的台灣近代史學界，實已呈現「廟堂史學」與非官方觀點的並立。黨史與國史的界限，此時雖不易釐清，不過，以中華民國史為內容的研究成果，的確陸續展現，打破後朝人修前朝史的觀念，亦有助於提升辛亥革命史研究的深度與廣度。在這段期間，以台灣學界針對革命期間的人物、組織、主義與宣傳、社會階層、區域情況、清廷的肆應、外交、華僑等議題，累積了為數甚鉅的細緻研究，其成績至今海峽兩岸都還難超越。

受政治大環境與學風氣質的影響，台灣的辛亥革命史研究專注於史實重建，甚少論及辛亥革命的「性質」。1982年，芝加哥論辯：辛亥革命究竟是「全民革命」抑或「資產階級革命」；兩岸學界的分歧，主要是對馬克思主義史觀的態度，表現在兩方面：一是對當時中國資產階級的發展程度估計不同，二是用於探究辛亥革命性質問題的方法論有異。中國大陸官方、學界迄今仍普遍認為，辛亥革命是近代中國史上革命大浪潮的一部，惟革命大業的成功猶須等待共產革命的完成。就台灣而言，不論政治立場為何，普遍不認為前述發展是歷史變遷的必由道路。抑有甚者，台灣社會內部正面臨國家發展走向、認同等問題；對許多問題的思考，兩岸勢必仍會持續出現歧異。

1980年代全世界許多地方都有重大變動，台灣不能例外，台灣的變動主要來自政治。一黨獨大的局面開始鬆動，在民主化與本土化的聲浪下，1987年7月15日的解嚴，實不啻為一場寧靜革命的開端。隨之而來，百多年來中國近代知識分子苦苦追求的政黨政治、言論集會自由、總統直選，竟在台灣一一實現。三民主義的教條受到冷落、意識型態和黨國體制不再籠罩國人，廟堂史學宣告消失。台灣政治既已步入政黨政治，官方對紀念活動的動員方式，也勢必和過去有所不同。原來的黨史機構，編制不斷縮小，甚至逐步退下舞台。即便官方在辛亥百年的今年仍舉辦系列活動，但紀念活動的趨弱、轉型難以迴避。中華民國立足於台灣，部分人士對時與空均甚遙遠的辛亥革命不抱持熱情，似不足為奇。以史學界言，在1945-1970年間，台灣史被視為中國地方史的一支，新的台灣史學門，針對近百年的發展，強調的是台灣歷經荷據、清領、日本殖民、戰後中華民國政府統治等歷程。這與過去官方史學強調的「辛亥革命、北伐、抗戰、剿匪、經營復興基地台灣」，實有路線上的不同。

辛亥革命對台灣來說，仍然值得紀念與回顧。如果我們將台灣各種體制沿革，視為一個Y字形的路徑，今日的現狀常可上溯至兩個源頭，一是1949年以前中國大陸的發展，一是日本殖民統治留下的遺產。中華民國的自由化、民主化成就，有其歷史體系與歷史遺產的繼承。作為辛亥革命「台灣觀點」，台灣內部未必有整齊畫一的共識，然確乎有一份對於自由民主的共同堅持。

劉曉波の魯迅批判と「孫文学説」の現在

山田 敬三

孫文は『建国方略』の一、「心理建設」（孫文学説）の末尾で「中華を恢復し、民国を創立せんとする予の三十年一日の如き志はついに成った」と記しながら、そのわずか数年後、臨終に際して口述したとされる「遺囑」（1925年）では「革命なおいまだ成功せず」と屈折した思いを後世に残した。一見、矛盾するような言葉ではあるが、実は先の文中（自序）でものっけから「一満州の専制を取り除けば、かわって無数の強盗の専制が現れ、その害毒のひどさは、前よりもいっそう甚だしい。」と記している。形式上の共和国は成立したが実態はともなっていない、と慨嘆しているのである。

魯迅の文章にも同じ思いが述べられていることを先日学会ニューズレター（第33号）でも記した（ただし、「魯迅日記」の引用年代12年を13年と誤る）が、辛亥革命の実質が当事者の理想にほど遠かったことが、その実現に生命を賭していた人々の手で率直に語られているのである。「最初の革命は排満だったので、容易に達成できたのです。その次の改革は国民が自分の悪い根性を改革することだったので、そこで尻込みしました。」

（「両地書」第8信）という魯迅の手紙の文面も孫文の「遺囑」と同じ年に記されていた。政治の改革者と精神の改革者の民国観は、みごとに符合しているのである。

「孫文学説」から「遺囑」にいたる数年間は、新文化、新思潮が提起された時期でもあった。「民主と科学」、「孔家店打倒」がスローガンとなり、多くの知識人が希望に燃え、五四運動が展開された。だが、その時代は長く続かず、二〇年代半ばには早くも退潮期を迎え、魯迅も「彷徨」の時期に入った。

獄中でノーベル平和賞を受賞したことでセンセーショナルに報道された劉曉波は、この時期までの魯迅を高く評価し、五四文化の問題提起を改めて重視する一方、三〇年代の魯迅を手厳しく批判し、同時に現代の孔子ブームに真っ向から挑戦する。その問題提起の是非や思考内容に関して、私なりに考えたことを報告させていただく予定である。

中国の近代化と市場経済の「型」

梶谷 懐

改革開放政策の実施以降、市場経済化の道を歩み始めた中国経済は、製造業企業の絶えざる参入による利潤獲得競争によって特徴付けられる一方、政府介入によるレントシーキングの余地も絶えず存在していた。特に金融・労働などの要素市場においては、深刻な地域間の分断性の問題が生じていた。また、地方分権的な財政改革が行われたものの、正規の税収が必ずしも十分ではない状況の下で、地方政府には自主財源の拡大を目標とした経済アクターとして行動するインセンティブが働いてきた。このような状況の下で、各地方政府は、要素市場への介入を通じた税収以外のレント＝予算外資金の獲得を求めて互いに競い合うことになった。このような図式は、地方政府が介入する要素市場が金融から土地市場へと変更する中で現代にも受け継がれている。

本報告では、以上のような現代中国の市場経済を特徴付ける性質を、20世紀以降近代国家への道を歩んできた中国において、計画経済による断絶を経ながらも歴史的に形成されてきた経済秩序に通底するものとしてとらえ、その意義について改めて検討することを試みる。具体的には、1. 硬直的な財政制度の下での中央-地方間の財源確保をめぐる綱引き関係、2. 自律的な地方勢力が要素市場に介入して行うレント獲得行動、3. 零細な商工業者による、一見すると無秩序な絶えざる利潤獲得競争を通じた市場秩序、4. 為替制度を中心とした世界経済とのリンケージ、という四つの観点から、中国における市場経済の「型」を整理することを試みたい。

また報告では、主に中華民国期と改革開放以降現代に至るまでの中国の市場経済のあり方を比較し、その異同の検討に焦点を当ててるものの、その中で浮かび上がってくる毛沢東時代、計画経済下の中国経済をどのように位置づければよいのか、という点に関しても、初歩的な考察を行う予定である。

中国法史における辛亥革命の位置づけ

高見澤 磨

1, 辛亥の年に起こった事件を以て辛亥革命とするならば以下の2点はその位置づけとなる。

(1) 20世紀初頭から清朝による近代西洋型法整備が行われており、民国においてもその成果の上に作業が継続されたので、その限りでは大きな位置づけとはならない。むしろ作業の一時中断として位置づけられることになる。

(2) 但し、憲法的側面においては以下の2点において重要な意味がある。

①帝制から共和制に移行したこと。民国初期には帝制への復帰も試みられ、また、満洲での例もあったが、これらは例外的な事件である。世界史的には20世紀初頭に大帝国が次々と帝制ではなくなっていくことの始まり（ロシア、ドイツ、オーストリア・ハンガリー、トルコ）であり、また、東アジア・東南アジアで独立を保った3国（中国・タイ・日本）のうち唯一の共和制の例である。

②各地が清朝に対する「独立宣言」を行う形で革命が進められた。これと清末の巡撫・総督などによる地域開発の成果とがあいまって、自治や事実上の独立状態を示す状況が生じた。また他国の承認を得て独立する場合もあった。このことが列強の進出とも表裏の関係にあったので、中華人民共和国においては「単一制」国家であることが強調され、連邦制や国家連合に対しては拒絶反応を示しており、これと結びついていると考えられる。

(3) 報告者にとっては今後の課題であり、学会においては問題提起にとどめる点としては、結社の自由との関係である（これも憲法問題である）。反清運動の担い手のひとつには秘密結社もあったが、そのことと民国期の結社の自由及び実態、中華人民共和国の結社の自由への制限などとの関係については検討中であり、学会までに一定の見解に整理するのは困難と思われる。問題の提起にとどめたい。

2, 学会においては上記の問題提起に重点を置き、清末から今日までの重要事項（今回のテーマが「100年」であるため一応それについての言及も必要であろうと思い）については略年表等にまとめて配布するにとどめ、質問等があった場合にそれらに言及するようになりたい。